

最期まで園児のために

ばあちゃん先生の遺志継ぎ再起へ



宮城を改装した旧園で託児所オープン準備をする職員。園長さんらも南気仙沼市の職員。宮城県気仙沼市で

大津波で園舎が丸ごと流された宮城県気仙沼市の南気仙沼幼児園。子どもたちに「ばあちゃん先生」と慕われた名物理事長の小松セイ子さん（左）。大震災発生時は園外の用事に出掛けているにもかかわらず、地震の後に戻ってきたところを津波にさらわれた。

宮城・気仙沼

子どもが大好きな人らしい最期だった。南気仙沼幼児園理事長の小松セイ子さん（左）。大震災発生時は園外の用事に出掛けているにもかかわらず、地震の後に戻ってきたところを津波にさらわれた。

「園での仕事は済んで

津波で廃園、職員が託児所

いたのに。きつと子どもたちが心配でたまらなかつたんだと思う。小松と後藤さん。卒園式の翌日には、幼児園のそばで後藤園子さん（右）が振り返る。

園児と職員らは、小松さんと入れ替わりように近くの小学校に避難していた。園舎の証言によると、小松さんは園に残り、子を迎えに殺到する親たちに「小学校にいるから、そっちに行つてあげて」と案内を続けていたという。

昨年亡くなった夫と三十年以上、幼児園を切り盛りしてきた。掃除から通園バスの運転までこな

し、「こらっ」と怒る時も細身の体で子どもを抱き寄せる。その姿は経営者というより、園児らが呼ぶ「ばあちゃん先生」そのものだった。

だが、愛した幼児園は折れ曲がった遊具を残し廃園に。避難前に保護者と帰宅した園児も一人亡くなった。四月二日、付近の会館で開かれた遺体引渡式の後、第二部は、「廃園説明会」だった。「ただ、残った私たちに、きつと気に入ってくれなう。」

後藤さんと残された保育士十五人で、市内の高台にある飲食店の倉庫を確保。三十畳ほどの部屋に畳を敷き、知人を頼って全園から食器や家具、絵本やおもちゃなどを集めた。

五月十六日から、南気仙沼幼児園と同様、一歳からの子を預かる。職員は当面、無給だ。最初の入所者は十一人だが、各施設に散った子どもたちも次第に戻ってくる。

「場所は違つけど、親も子ども慣れた雰囲気がいいと思つて」と後藤さん。みんなで考えた新しい託児所の名は「おひさま」。太陽のように子どもたちを照らした小松さん、きつと気に入ってくれなう。」

「ばあちゃん先生」の遺志受け継ぎ



子供たちに笑顔で話しかける職員

託児所「おひさま」開設

津波被災 津波 幼稚園先生がスクラム

気仙沼

津波で園舎が流失し、閉園を余儀なくされた気仙沼市内の幼稚園の先生たちが、小さな託児所を開設した。「あの日」、最期まで子供たちを守ろうとして犠牲になった「ばあちゃん先生」の遺志を受け継ぎ、悲しみを乗り越えながら新たな一歩を踏み出した。

住宅地の中にある
東新城公園。青空の下、滑り台などで無邪気に遊ぶ子供たち。「元気な姿を見て、逆に自分たちが励まされていきます」。保育士の女性が目細める。

公園から徒歩約10分の場所（茗荷沢）にある託児所。飲食店の倉庫を改装した20畳ほどの小さな部屋で、1歳から4歳までの幼児20人が歌

やお絵かきなどを楽しむ。託児所を運営するのは、閉園した南気仙沼幼稚園の元職員6人。仮設住宅などから通う子供たちをボランティアで預かっている。

大川河口付近（南郷）にあった同幼稚園は、津波で園舎が丸ごと流され、土台しか残らなかつた。同幼稚園の理事長だった小松セイ子さ

ん（70）。昨年亡くなった夫と30年以上、幼稚園を切り盛りし、子供たちから「ばあちゃん先生」と慕われていた。

地震発生時、所用で外出していた小松さんは、地震の後、園に戻ってきたところを津波に飲み込まれた。園舎にいた約100人の園児と職員は近くの南気仙沼小に逃げ込んだが、小松さんとはすれ違いつつ、

「大好きだった子供たちと、長年守ってきた園舎の事が、心配で仕方なかったんだと思います」。当時、園長だった後藤昌子さん（52）は振り返る。

幼稚園は閉園が決まったが、預け先

困っていた保護者からの要望や温かい励ましを受け、残った保育士らで先月16日、託児所を開設した。

机やイス、玩具などは、全国各地の幼稚園や個人から寄せられた支援物資で賄うことができた。小松さんの姪で、託児所を運営する里見栄美さん（50）は「多くの皆さんの励みや協力で、再び歩出すことができました」と感謝する。

託児所の名前は「おひさま」。先生たちが悩んだ末に考えた。明るい子供たちに育ってほしいという、「ばあちゃん先生」の願いが込められている。

「明るい子供たち育てたい」